

## 新製品発売のご案内

[エソテリック名盤復刻シリーズ]

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」&第5番「春」

ダヴィッド・オイストラフ(ヴァイオリン)

レフ・オボリン(ピアノ)

シューベルト:ピアノ五重奏曲「ます」&さすらい人幻想曲

アルフレッド・ブレンデル(ピアノ)

クリーヴランド四重奏団のメンバー他

エソテリック独占販売 2015年6月10日 発売

### ベートーヴェン:

#### ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」&第5番「春」

ダヴィッド・オイストラフ(ヴァイオリン)

レフ・オボリン(ピアノ)

- 品番:ESSD-90120
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034 219704
- レーベル:DECCA(旧フィリップス)
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:室内楽曲



### シューベルト:

#### ピアノ五重奏曲「ます」&さすらい人幻想曲

アルフレッド・ブレンデル(ピアノ)

クリーヴランド四重奏団のメンバー他

- 品番:ESSD-90121
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034 219711
- レーベル:DECCA(旧フィリップス)
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:室内楽曲



DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2 チャンネル・ステレオ[マルチなし]

美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 勝村 治司)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の2作品は、エソテリック定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。

この2作品はエソテリックの独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

## [アルバムの特徴]



### ベートーヴェン:

### ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」&第5番「春」

ダヴィッド・オイストラフ(ヴァイオリン)

レフ・オボーリン(ピアノ)

ヴァイオリンという楽器の魅力をとことんまで堪能させてくれる豊潤な音色。20世紀ヴァイオリン界の最高峰がその最盛期に残したベートーヴェンの名ソナタ2曲、初のSuper Audio CDハイブリッド化が実現。 \*2015年5月現在

### ■ 20世紀最大のヴァイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフ

20世紀は様々な個性的なヴァイオリニストを生み出しましたが、その中でもヴァイオリンという楽器の豊麗な美しさを最もストレートに聴かせてくれたのは、ソヴィエトのオデッサ出身だったダヴィッド・オイストラフ(1908.9.30~1974.10.24)でした。5歳から生地の名教師ストリヤルスキーに師事しその才能をすくすくと伸ばした天才は、やがて1935年の全ソ音楽コンクールやヴィニャフスキ国際コンクールでの入賞で大きく注目され、さらに1937年のイザイ国際コンクールでの優勝でその名を不動のものとなりました。

盤石とも思える安定した技巧、豊潤な音色、誠実で洗練された語り口、スケールの大きな表現力、格調の高さなど、ヴァイオリニストあるいは音楽家としてのさまざまな要素が一つとして突出することなく、高度な次元で完成していた点に大きな特徴がありました。ロシアのヴァイオリン演奏の伝統を継承しながらも、それをユニヴァーサルなものにまで高めることができたのは、ひとえにこの全人的な音楽性の賜物であったといえるでしょう。手中にしていたレパートリーも、バロックからシヨスタコーヴィチやハチャトゥリアンなど同時代の音楽まで網羅し、独奏曲から室内楽・協奏曲まで多岐に及び、1930年代後半から亡くなるまで40年近く続けられたレコーディング活動を通じて後世に残された演奏の量も数多く、いずれの点でも破格の存在でした。教師としても声望に恵まれ、ギドン・クレーメルらを門下から輩出しています。

### ■ オイストラフの代表盤

残された膨大な録音の中からオイストラフの代表盤を選び出すのはほとんど不可能ともいえますが、その中でもまず指を屈するべきは1962年にパリでレコーディングされたベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集でしょう。当アルバムは、その全集から名前付きの名曲2曲、「クロイツェル」と「春」を選んでカップリングしたものです。

オイストラフは1962年5月~6月にかけてパリのサル・プレイエルでベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲を演奏しており、この録音もそれを契機にパリで収録されたものと思われます(録音日の詳細は不明ながら、1962年10月の録音とされています)。モノラル時代のグリュミオー+ハスキル盤、ステレオ時代のフランチェスカッティ+カザドシュ盤などと並び、これらの作品の最もスタンダードな演奏として長く聴き続かれてきた名演奏です。20世紀中盤の美意識における古典的な様式感が際立ち、作曲者が作品に託した高潔な精神が美しく輝き出る感があり、まさに作品の理想的再現と言えるでしょう。

### ■室内楽の極みともいえる、名手オボーリンとの共演

そのオISTRAフの名演を力強く支えているのが名手レフ・オボーリン(1907.11.11~1974.1.5)のピアノです。

オボーリンは、モスクワ音楽院で学び、名教師イグムノフの薫陶を受け、1927年の第1回シヨパン国際ピアノ・コンクールで優勝するなど、20世紀ソ連の生み出した類まれな名ピアニストの一人でした。オISTRAフとは同世代であり、1935年に初めて演奏会で共演して以来生涯にわたって共演を続けました。1941年にはオISTRAフ、チェロのクヌシェヴィツキーと三重奏団を結成して、室内楽の分野でも大きな足跡を残しています。

オISTRAフは、専属伴奏者の存在だったヤンポリスキーのほかにも、ゴリデンウェイゼル、ギンズブルグ、リヒテル、バドゥラ＝スコダなど、ソリストとしても強い個性を持っていたピアニストと共演していますが、オISTRAフの全人的なバランスの取れた音楽性を最も引き立てつつ、作品の魅力を引き出すことができたのはオボーリンであったといえるのではないのでしょうか。その意味で、この2人が最も脂の乗った時期に、彼らの中心的なレパートリーでもあったベートーヴェンのソナタが、セッションによるステレオ録音としてきちんとした形で残されたのは何よりの僥倖というべきものでした。

### ■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音場所の詳細やスタッフ名は明らかにはされていませんが、響きの少ないどちらかというスタジオ風の雰囲気サウンドで、ヴァイオリンはやや左側に定位し、その奥から右側にかけてピアノが定位するバランスで収録されています。響きが少ないだけに、演奏のニュアンスは一音一音に至るまで明晰で、オISTRAフの見事なボウイングによるフレー징の見事さ、オボーリンのサポートぶりの絶妙さが手に取るように聴きとれます。

歴史的な名盤だけにCD発売初期からデジタル・リマスター化されており、その後24ビット・マスタリングで発売されたり、韓国ではXRCD化されたりもしていますが、今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまでのエソテリック企画同様、使用するマスターの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたエソテリック・ブランドの最高級機材を投入、また同社のMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、貴重な音楽情報を余すところなくディスク化することができました。

### ■「この録音こそ20世紀の演奏史を語る上で決して忘れてはならないものの一つ」

「オISTRAフとオボーリンのコンビは、遅いテンポを主体に極めて安定した演奏を繰り返してゆく。高い音楽性と、落ち着いた風格と、やや沈んだ、ケレン味のない表現が好ましい。両者とも、楽譜に書かれた全ての音をきっちりと弾き、ベートーヴェンの音楽自体に語らせようとしており、心のこもった美しい音色や優秀な音楽性がそれを支える。スケールの大きいシンフォニックな表現だ。」(『レコード芸術別冊 クラシック・レコード・ブック Vol.5 室内楽曲編』、1985年)

「このコンビによる演奏は、オボーリンのピアノが多少引っ込み気味のため、アピールする力がその分割り引かれてしまった感じがするけれど、風格ある誠実な姿勢で細部に豊かな感情を注入し、かつ全体をゆるぎなく造形していくオISTRAフは見事。」(『クラシック不滅の巨匠たち』、1993年)

「ソヴィエトを代表する大ヴァイオリニストのオISTRAフが、名実ともに世界最高クラスの演奏家であることを確認させたレコード、それがオボーリンとのデュオによるこの録音だった。力強いボウイングから弾き出される、美しいヴィブラートを伴った豊麗で輝かしい音色、洗練の限りを尽くした端正な音楽の語り口には、強靱無類の技巧を、それと感ぜさせぬ人間味の暖かさがあって、芸術的奥行きが深さが、激しく高揚する魂の燃焼をいちだんと作品そのものの本質に近付ける。ここでのオISTRAフは、まさしく円熟した風格でもって、若いベートーヴェンならではの気概を悠然たるスケールの音楽に結実させる。(・・・)見逃せないのがオボーリンのピアノの安定した表現力である。内面に秘めたロマンティックなファンタジーが、アカデミズムと思えるほどの様式感の上に美しく構築されて、オISTRAフの全表現をしっかりと支えるあたり、万全と言える。」(『ONTOMO MOOK クラシック不滅の名盤 800』、1997年)

「この録音こそ20世紀の演奏史を語る上で決して忘れてはならないものの一つ。オISTRAフが長年の盟友であるオボーリンをパートナーに選んでいるところがみそ。その大らかにヴァイオリンを包み込

みなながら、しかもきっちりと主張も展開するピアノがこれらの作品においていかに重要な役割を果たしていることか。このピアノあってこそ、オイストラフは自在にその品格の高い音楽を惜しげもなく展開することが可能になっている。素晴らしいデュオである。」(『ONTOMO MOOK クラシック不滅の名盤1000』、2007年)

「オイストラフはさまざまなピアニストと共演を行なったが、その個性や持ち味を最も無理なくナチュラルに引き出すことのできたパートナーは、やはりオボーリンであった。そして、その上で完成度の高いアンサンブルとゆるぎない演奏解釈が打ち出されたこの録音は、まぎれもなくオイストラフの真価が花開いた演奏であり、さらに多くのベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタの録音の中でも、もっとも価値のある名演の一つになっている。オイストラフの人間味溢れる骨太で雄弁な語り口は格別の説得力を放っており、そこではホットで力強い作品像がしっかりと彫琢されているのである。」(『クラシック名盤大全 室内楽曲編』、1998年)

「絶頂期の巨人たちの共演。幾度聴いても、そのつど感激を新たにする演奏だった。なかでも「クロイツェル」の推進力は、ここで味わっただけのものをその後まだ耳にしていない。ピアノのオボーリンを含めて絶頂期の巨人たちの共演という意味で二重の価値もある。」(『クラシック不朽の名盤 1000』、1984年)

#### [収録曲]

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン  
ヴァイオリン・ソナタ 第9番 イ長調 作品47《クロイツェル》  
1 第1楽章: アダージョ・ソステヌート・プレスト  
2 第2楽章: アンダンテ・コン・ヴァリアツィオーネ  
3 第3楽章: フィナーレ(プレスト)

ヴァイオリン・ソナタ 第5番 ヘ長調 作品24《春》  
4 第1楽章: アレグロ  
5 第2楽章: アダージョ・モルト・エスプレッシヴィオ  
6 第3楽章: スケルツォ(アレグロ・モルト)  
7 第4楽章: ロンド(アレグロ・マ・ノン・トロppo)

#### [演奏]

ダヴィッド・オイストラフ(ヴァイオリン)  
レフ・オボーリン(ピアノ)

[録音]1962年10月、パリ、ル・シャン・デュ・モンド

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社) [Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(ピクチャークリエイティブメディア株式会社、マスタリングセンター) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ) [解説] 諸石幸生 大木正興 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社

#### [アルバムの特徴]



シューベルト:  
ピアノ五重奏曲「ます」とさすらい人幻想曲  
アルフレッド・ブレンデル(ピアノ)  
クリーヴランド四重奏団のメンバー他

1977年、ピアニストとして絶頂を極めていたブレンデルが、異色の共演で打ち立てた巨大な室内楽のメルクマール。レコード・アカデミー大賞受賞の名盤、初のSuper Audio CDハイブリッド化。 \*2015年5月現在

## ■ 正統派の巨匠、アルフレッド・ブレンデル

2008年に引退するまで、20世紀後半から21世紀初頭にかけて、みずみずしく格調高い表現を聴かせる正統派の巨匠として知られた、チェコ生まれのピアニスト、アルフレッド・ブレンデル(1931年生まれ)。6歳でピアノを始め、ザグレブを経て第2次大戦中の1943年に移ったグラーツ音楽院で学び、さらに戦後、ウィーンに赴いて独学でピアノの研鑽を続けたブレンデルに大きな影響を与えたのは、ルツェルンのマスタークラスで接したエドヴィン・フィッシャーでした。持ち前の卓越した技巧と知的な分析力に加え、フィッシャーの薫陶を受けたブレンデルは音楽家としての奥行きを増し、ブゾーニ国際コンクールで優勝を果たすなど、ピアニストとしてのキャリアを順調にスタートさせました。

## ■ 目覚ましく躍進した1970年代のブレンデル

バッハからシェーンベルクに至る幅広いレパートリーを持っていたブレンデルは、最初からレーコーディングに積極的で、すでに1960年代からアメリカのヴォックスやヴァンガード・レーベルに数多くの名盤を残しています。この時期にブレンデルはベートーヴェンの代表的なピアノ作品をほぼ網羅し、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、シューマンなど、ドイツ・オーストリアの作曲家の王道ともいえる作品を立て続けにレーコーディングしたものの、その名が真の意味で世界的に知られるようになったのは、1970年に専属契約を結んだフィリップス・レーベルへのレーコーディングを通じてでした。

1969年にブレンデルがウィーンからロンドンに移ったのと期を一つにするように、1970年に開始されたフィリップスへのレーコーディングは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集の再録音を皮切りに、マリナー指揮アカデミー室内管とのモーツァルトのピアノ協奏曲全集(1970年～84年)、シューベルトのピアノ作品集(1971年～74年)、ハイティンク指揮ロンドン・フィルとのベートーヴェンのピアノ協奏曲全集(1975年～77年)など、作曲家ごとの大規模なチクルス録音を並行して展開させ、その知性あふれる新鮮な演奏解釈と当時のフィリップス・レーベルならでの明晰なサウンドとが相俟って、絶大な評価を受けるようになりました。

## ■ 若きアメリカのカルテット、クリーヴランド四重奏団との異色の共演

そうした充実のレーコーディング活動を続けていたブレンデルがフィリップスで初めて取り組んだ室内楽が、1977年のクリーヴランド四重奏団メンバーとのシューベルト「ます」でした。

ソリストとしてのレーコーディングに専念しているばかりかに思えたブレンデルによる突然の室内楽録音であったというだけでなく、1969年にマールボロ音楽祭で結成されたアメリカのカルテット、クリーヴランド四重奏団との共演であったという点が大きな注目を集めました。

当時のアメリカのソリスト級の実力を持つ生え抜きの奏者を4人そろえた感があったクリーヴランド四重奏団はその冴えた技巧と機能的なアンサンブル能力によって、これまでの団体とは一線を画し、カルテットの歴史を塗り替えるとも目されるほどの評価を獲得していました。1972年のブラームスの弦楽四重奏曲全集を皮切りに、RCAによって続々と発売されたアルバムもそれまでの伝統にとらわれない若々しく新鮮な解釈であり、新世代のカルテットとして一世を風靡する存在になっていただけに、脂ののりきっていたブレンデルとの共演は大きな期待をもって迎えられたのでした。

## ■ 前代未聞の新鮮さを持つ「ます」

その結果誕生したのは、かつてないほどの明晰さを湛え、これまでの作品のイメージを一新させるかのような、鮮度の高い「ます」でした。あらゆる音符や音型が吟味されつくし、隅々まで神経が行き届きながらも決してそれが過剰になることなく、知性的でありながらも伸びやかさを失わない室内楽というジャンルの在り方の新しい魅力を開示したのが、ブレンデルとクリーヴランド四重奏団のメンバーによるこのシューベルト「ます」だったわけです。

1978年の音楽之友社「レコード・アカデミー賞」の大賞を受賞することになったのも当然のことと言えるでしょう。

## ■ ヘンリー・ウッド・ホールでの名録音

なお、「ます」の録音が行なわれたヘンリー・ウッド・ホールは、もともとは聖トリニティ教会という名の教会でした。1970年代初頭、オーケストラのリハーサル場所が慢性的に不足していたロンドンで、ロンドン交響楽団とロンドン・フィルがリハーサル・スタジオを探していた際に、当時は使われていなかった聖トリニティ教会の優れた音響が見出され、改装を経て1975年にスタジオとしてオープンしました。ロ

ロンドンの夏の風物詩プロムスの生みの親であった名指揮者ヘンリー・ウッドの名を取って命名され、そのナチュラルで美しいアコースティックゆえに、オーケストラからソロまで大小さまざまなアンサンブルのレコーディングにも多用されるようになり、瞬間にロンドンの代表的なレコーディング場所としてその名を知られるようになりました。

1969年からロンドンに居を移したブレンデルもこのホールを愛し、1970年代以降のレコーディングの多くをここでこなしています。ピアノを中心に各弦楽器の響きを鮮明にとらえた明晰なサウンドは、ブレンデルとクリーヴランド四重奏団による細部まで弾きこまれた緻密な演奏の魅力を高めています。

#### ■ 1970年代のシューベルト・チクルス初期の名演「さすらい人」

併録の「さすらい人幻想曲」は1971年の録音で、フィリップスに移籍後の数年間にブレンデルが集中的に取り組んだシューベルトのピアノ作品集からの1曲です。後期三大ソナタをはじめとする主要ソナタ、2つの即興曲集や楽興の時などを含むこれらの作品をブレンデルは1980年代に再度録音することになりますが、1970年代の一連のシューベルト録音は、極めて入念に彫琢されながらも生き生きとしたエネルギーを失わず、当時のブレンデルの充実ぶりをそのまま刻み込んでいるかのようです。この「さすらい人幻想曲」も、作品全体を貫く構成感、シューベルトならではの美しい歌心と、終楽章のフーガを弾き抜くヴィルトゥオーゾ的な力技の鮮やかさを両立させた名演といえるでしょう。

この「さすらい人幻想曲」のレコーディングが行なわれたザルツブルクのモーツァルテウムは1841年創立の名門大学で、併設されたホールもレコーディング会場として知られています(グロッサーザール[大ホール]とウィナーザール[小ホール]の2つがあり、どちらでレコーディングされたかはクレジットされていません)。

#### ■ 最高の状態でSuper Audio CDハイブリッド化が実現

今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまでのエソテリック企画同様、使用するアナログ・マスターテープの選定からデジタルへのトランスファー、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたエソテリック・ブランドの最高級機材を投入、また同社のMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、貴重な音楽情報を余すところなくディスク化することができました。

#### ■ 「シューベルトの音楽そのものの純粋性を表出した、稀有の一例」

##### ピアノ五重奏曲「ます」について

「ここにかつてないほどシューベルトの神髄に迫る表現が生み出されていることに驚嘆した。この演奏では、弦がピアノを支え、あるいは対立するのではなく、文字通りピアノに同化し、主従を考えさせないほどの融合を実現している。歌う呼吸も自然であり、テンポは絶えずデリケートに揺れ動きながら迫力更新を重ねて、一瞬たりとも緊張を失うことがない。シューベルトの音楽そのものの純粋性を表出した、稀有の一例である。」(『レコード芸術』1979年10月号)

「リリースされた当時から、ブレンデルの円熟した味わいと若き弦楽奏者たちの清新な表情が見事にバランスし、融合した稀に見る名演として高く評価されてきた。シューベルトを得意とするブレンデルのピアノは、透明感に満ちた美しい音色を駆使しての情感豊かなリリズムと、キリリと引き締まった造型感のバランスが絶妙で、それだけでも大いに魅力的。ただそれに触発されたクリーヴランド弦楽四重奏団のメンバーが、アンサンブルを緻密に保つだけでなく、新鮮さと覇気を持った演奏でブレンデルに反応しており、実にスリリングな成果を上げている。」(『ONTOMO MOOK クラシック不滅の名盤1000』、2007年)

「譜面の読みが鋭く、作品に対する切り込みが深い、いわば合理的な解釈により正当的な演奏として印象に残る。一方、テンポの揺れが自然で、そこに息づいている情感の豊かさや呼吸緊密さなどにも、注目すべきものがある。ピアノと弦楽器群が、どのパートも突出することなく、実に見事な融合を見せている。そして、その節度を保った情緒表現は、演奏に格調高さを与えており、この演奏者たちの組み合わせが感覚的にも見事なバランスを保っていることを示す。」(『クラシック名盤大全 室内楽曲編』、1998年)

「ブレンデルは相当に頑固なピアニストだ。この「ます」のような室内楽の場合でも、独奏曲のときに示す彼の世界を頑なまでに守り抜き、崩そうとはしない。ここにおいても、若いクリーヴランドSQの音楽

の方に、彼から寄り添っていくようなことはほとんどせず、彼は彼の世界を作り上げることに没入する。その世界が並々ならぬものだから、それにあわせようとする共演者たちの努力たるやたいへんだ。だからこそ、この演奏の独自性ができたのだろう。」(『クラシック不朽の名盤 1000』、1984年)

### さすらい人幻想曲について

「このレコードが発売されて、それまでは長いばかりで面白くないとされていた変ロ長調ソナタが名曲として浮かび上がった。「さすらい人幻想曲」もブレンデルの見事に考えられた構成美によって、新しい響きを生んだ。ブレンデルはこれらの曲のブームの仕掛け人だ。」(『レコード芸術別冊 クラシック・レコード・ブック Vol.5 器楽曲編』、1986年)

「シューベルトのピアノ曲の重要作は、ソナタであれ、小品であれ、全て収録されている。ブレンデルは、元来、切れ味の鋭さで聴き手を魅了するのではなく、どこか温もりを感じさせ、親愛の情を生じさせるピアニストである。そういう気質がシューベルトの作品に実に有効に作用、おおらかで虚飾のない世界が生み出される。華麗なる音響に勝る誠実なく音楽こそ、ブレンデルの狙いであろう。」(『レコード芸術別冊 クラシック・レコード・ブック Vol.5 器楽曲編』、1986年)

### [収録曲]

フランツ・シューベルト

ピアノ五重奏曲 イ長調 D.667(作品 114)《まず》

- 1 第1楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ
- 2 第2楽章: アンダンテ
- 3 第3楽章: スケルツォ(プレスト)
- 4 第4楽章: アンダンティーノ(主題と変奏)
- 5 第5楽章: フィナーレ(アレグロ・ジュスト)

6 幻想曲 ハ長調 D.760(作品 15)《さすらい人》

### [演奏]

アルフレッド・ブレンデル(ピアノ)

1-5

クレーヴランド弦楽四重奏団員

ドナルド・ワイラー・スタイン(ヴァイオリン)

マーサ・ストロンギン・カツツ(ヴィオラ)

ポール・カツツ(チェロ)

ジェイムズ・ヴァン・デマーク(コントラバス)

[録音]1977年8月16日&17日、ロンドン、ヘンリー・ウッド・ホール(1-5)、1971年11月13日~19日、ザルツブルク、モーツァルテウム(6)

[初出]9500442(1-5/1978年)、6500 285(6)

[日本盤初出]X7843(1978年8月)、X5677(6)

[オリジナル・レコーディング]

[レコーディング・プロデューサー]フォルカー・シュトラウス(1-5)、ヴィルヘルム・ヘルヴェック(6)

[バランス・エンジニア]セース・フィジガ(1-5)、ヴィレム・ヴァ・レーウエン(6)

[レコーディング・エンジニア]ディルク・ヴァン・ディルク(1-5)、フランス・ヴァン・ドンゲン(6)

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社) [Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]

杉本一家(ピクチャークリエイティブメディア株式会社、マスタリングセンター) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫

(有限会社エフ) [解説]諸石幸生 大木正興 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社



## エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。

エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

報道関係からのお問い合わせ 掲載用の画像データなどのご用命は

エソテリック株式会社 販売推進部

Tel 042(356)9230/Fax 042(356)9240

(PM6:00以降はTel 042(356)9238へお願いいたします。)

お客様からのお問い合わせは

AVお客様相談室

受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242